

## 「日記中毒者」の世界（佐野眞一『枢密院議長の日記』）

筑後（現在の福岡県）久留米出身の倉富勇三郎は司法官や宮内省の要職を歴任し、最後は枢密院議長にまで登り詰めた人物だが、その死から五十年以上が経過し、その存在は殆ど忘れ去られていた。けれども、再び脚光を浴びつゝある。六十七歳からの二十六年間にわたり、大学ノート二百九十七冊に小さな字でびつしりと記された膨大な日記によつて…。

この日記、量もさることながら、書いた当人も読めたのかと思ふくらひの悪筆で、内容の冗長さと同様に読む者を辟易とさせる。以前、筆者も、五・一五事件当日の記事を研究室の仲間たちと共に読み始めたが、途中で投げ出したくなった。

そんな倉富日記に、佐野氏が挑戦したといふ。「読売中興の祖」正力松太郎や「阿片王」里見甫などについて、刺激的なノンフィクションをものしてきた氏が、この日記を如何に料理してくれるのか期待しながら、新書らしからぬ厚さ（四百頁超）の本書を手を取った。

さすがの氏も、「現実の倉富日記を目の前にして、途方に暮れた」やうだ。しかしながら、「枢密会」なる輪読会を断続的に開いて専門家の指導を仰ぎ、約七年かけて、四百字詰原稿用紙で約五千枚分にも及ぶ記述——それでも、ほんの一部に過ぎぬ——を翻刻したといふ。

現存する倉富日記は大正八年の一月一日から始まつてゐるが、大正九年十二月に宗秩寮総裁代理となつたあたりから、興味深い内容が増えてくる。宗秩寮は皇族や華族に関する事務全般を司る役所であり、宮中の機密情報に触れる機会が増えたからだ。時あたかも、大正天皇の御不例が公然の秘密となり、さらに、皇太子殿下裕仁親王（後の昭和天皇）と久邇宮良子女王の御婚約が問題となる（宮中某重大事件）など、御皇室が危機に直面した時代であつた。

こゝで、内容の一部を概観して置かう。

まづ、宮中某重大事件が取り上げられる（第一章）。婚約破棄を迫られた久邇宮家は国家主義的な「壮士」連の助力を受けたが、その中には「羽織ゴロ」も混ぢつてゐたやうだ。倉富日記には、怪文書に関連して宮家が強請に遭ひ、五千元（現在の貨幣価値にして約千五百万円）を払つて解決したこと、それも宮内大臣（牧野伸顕）や内務大臣（床次竹次郎）ら政府中枢の諒解を得て行はれたことなどが淡々と記されてゐる。

また、旧朝鮮王家を巡る問題（第三章）や上流社会のスクヤンダル（第四章・第六章）に関する記述も興味深い。後者には、「赤銅御殿」の柳原白蓮や「赤い貴族」有馬頼寧など如何にもといふ人物ばかりでなく、「品行厳正」と評された貴族院議長・徳川家達

なども登場する——恥ずかしながら、筆者は「鶏姦」（＝男色）といふ語があることを初めて知った。

さらに、枢密院議長として関はつたロンドン海軍軍縮条約や、評者を悩ませた五・一五事件に関する記事などが紹介される（第七章）。

「日記中毒者」倉富は、かうした権力の裏面だけでなく、身の雑事も書き残した（第五章）。朝鮮人参や冷水摩擦など健康維持に気を遣ひ、愛妻家で家族思ひの一面を有する。村夫子然とした倉富の風貌（口絵写真）と併せ、読者に何とも云へぬ印象を与へるだらう。

因みに、倉富日記の最後（昭和十九年十二月三十一日）は、次の一文で締めくゝられてゐるといふ——「午後五時三十分頃、硬便中量」。

以て瞑すべし…。

（かねこむねのり氏＝姫路獨協大学講師・近代日本政治思想史専攻）